

ひたちなか市立勝田第一中学校 三年

動物と共に生きる未来

金^{かな}澤^{ざわ}里^{さと}美^み

「『親切な人に見つけてもらってね』優しそうに聞こえても、犯罪者のセリフです。」

たまたま見ていたCMの、この言葉を聞いたとき、私はドキリとしました。親切な人に飼ってもらえるなら動物にとっても幸せなはずなのに、なぜだろうと思いました。答えは簡単です。動物を捨てることは犯罪だからです。

そういえば、近所のコンビニエンスストアの裏に野良猫がいることを思い出しました。無責任に餌がまかれたり、可愛いと言われながら写真を撮られたりしていました。いつもどぶの中にいました。「かわいそうだな」「誰か引き取らないかな」「野良猫がいなくなればいいのに」と思う反面、何もできない後ろめたい自分もいました。私自身、

ペットは飼っていませんが、このCMがきっかけで動物の殺処分について興味を持つようになりました。

二〇一九年度、日本の犬・猫の年間殺処分件数は約三万匹で、一日に換算すると約一〇五匹でした。十年前と比べ、約九分の一に減ったとはいえ、私には衝撃的な数字でした。

「ペット先進国」と呼ばれるドイツでは、「動物は社会に欠かせない一員だ」という考えが市民に根付き、動物に関する法律がしっかりと整っています。例として、犬と飼い主には月に約千円の「犬税」という税金が課せられるそうです。そこで集まった税金は、犬のことにだけでなく、公道や公園の整備などにも使われています。この税により、多頭飼いや安易に犬を飼うという行為が抑制され、犬の保護

にも繋がります。このような税が、犬だけではなく猫にもあれば、ペットを飼う前に一歩立ち止まって考えるようになります。すると、軽い気持ちでペットを飼う人が減り、日本の殺処分の数ももっと減るのではないのでしょうか。日本でもこの制度を導入したら、その集めた税金を動物保護団体に使ったり、セラピードッグの育成や、人も犬も過ごしやすい公園づくりなどに役立てたりしたらよいと考えます。

日本では、新型コロナウイルス感染症が流行する以前の五年間、ペット購入件数は一定でした。しかし、感染拡大後のこの二年間はペットの購入数が増加傾向にあります。自粛生活が続き、ペットからの癒やしを求めたり、家族内でのコミュニケーションを深めるきっかけのために飼われたいしていることが増えてきているからです。確かに、自分も柴犬を飼いたいと何度か思ったことがあります。また、犬や猫を飼い始める友達が増えたり、その友達の愛犬や愛猫の話の聞いたりとすると、羨ましくも思いました。しかし、数年後に新型コロナウイルス感染症が終息して、自由に行動・外出ができるようになったとき、自分の関心はペット

に向いているのでしょうか。日々の世話や旅行をするとき、ペットの存在が邪魔になってはいないのでしょうか。そんなとき、「親切な人に見つけてもらってね」というあのCMのセリフを口にしていないのでしょうか。やはり、軽い気持ちで動物は飼えません。そんなとき、私は動物愛護法の「終生飼養の義務」という言葉を思い出しました。

動物愛護法や、民間の動物保護団体の活動により、ここ十年間動物の殺処分は約九分の一に減ってきました。ならば、これからの十年間でさらに九分の一に、いや、十分の一に減らせるのではないのでしょうか。ドイツの犬税のような税制度の導入や、動物を飼うには大きな責任が伴うことを、一人一人が意識していったなら、いつか野良犬や野良猫などの殺処分される動物がいない社会になるのではないのでしょうか。

